

『海賊王に囚われた花嫁～敏感なナカを宝石で辱められ...～』

著：涼白スズナ

ill：いけや

「可愛い尻のくせに、こんなでっかいの飲み込んでしまうなんてな」

ククッ、とアルベルトの背後にいる男が笑う。

ダークブロンドの髪にヘーゼルナッツ色の瞳、そしてシャープな顔立ちをした、若く大柄な美丈夫だ。しかし上品そうな見た目とは裏腹に、彼は私掠船トネール号の船長――すなわち海賊だった。

男はアルベルトを四つん這いにさせ、後ろから獣のように犯していた。

アルベルトの小さな尻にずっぷりと串刺しのように肉の棒を押し込み、ぐちゅぐちゅと卑猥な音を立てて抜き差ししている。

「あんっ！ ああ……んっ、マティアス……っ！」

アルベルトは男の名を呼ぶ。しかし彼の名を呼んだところで動きは止まらない。それどころか煽られたようにますます動きを激しくする。

アルベルトの尻の奥にあった紅色の蕾はマティアスによってすっかり蕩かされ、淫らに開ききった花となって彼を受け入れていた。

深く入り込んだマティアスのものは、引き抜かれたかと思うと再び奥まで入り込む。引き抜かれるときに彼の張り出したくびれがアルベルトの弱いところを引っかき、その途方もない淫らな刺激にアルベルトは高い声を上げた。

「ひい……っ！ アアッ！」

奥を抉られるたび、アルベルトの体はガクガクと崩れ落ちそうになる。だが、マティアスは改めてしっかりとアルベルトの腰を抱え、揺さぶり続けた。

「も……っ、いやあ……っ、ああっ！ ひっ……！」

アルベルトの手は必死にシーツをかき寄せ、快感をやり過ぎそうとしている。なのに体の方は言うことを聞いてくれない。マティアスから与えられる刺激をもっと欲しいというように自ら腰を揺らす。

「おいおい。いやって言ってる割に、やらしくケツ振ってやがる。この好きものめ」

違う。そうじゃない。男との交合など望んではない。

けれどアルベルトの体はすっかり快感を覚え込まされていた。

「もうすっかりここは女になっちゃったな。トロット口のくせにきゅうきゅう締めつけやがって。これまで抱いたどの女よりも具合がいいぜ。なあ、淫乱なアルベルト坊ちゃん、そんなにおれのはいいか」

ぐい、とさらに深く男は中を抉った。

「マティアス……っ！ マティアス、やめ……ッ！ あああん！」

「どんなに美人で清楚な坊ちゃんも、一皮剥けば淫乱な獣ってことだ。つい何日か前まで女も知らなかったってのにな。こんなにいやらしく男を啜えて悦ぶなんて神様も驚いているだろうよ」

神様、と聞いて、敬虔な信者であるアルベルトは手で耳を覆いたくなくなった。

アルベルトが信じる神の教えでは同性愛はタブーである。このような行為は到底許されるものではない。

いままで慎ましく、女性との交わりですら縁もなく暮らしていたのになぜこんなことになっているのか。

「……ああ……、んっ、あっ、ああ……」

母親譲りの美しい黒髪を振り乱し、アルベルトは快感に背を反らす。足の指を丸め、抉ってと言わんばかりに尻をマティアスへ突き出した。

それでも足りなくて、とうとう胸をシーツに擦りつける。乳首がシーツに擦れる刺激にまた腰が揺れた。

「なんだ足りねえのか。貪欲だな、おまえは。欲しいなら欲しいってねだっていいんだぜ」

楽しそうなマティアスの声にどうしていいかわからなくなる。

「ちが……っ、やあ……、も、おねがい……ッ」

もう絶頂に近いのに男はまだ終わらせてくれそうになかった。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>